

世界最先端の生物生息環境解析システムの紹介

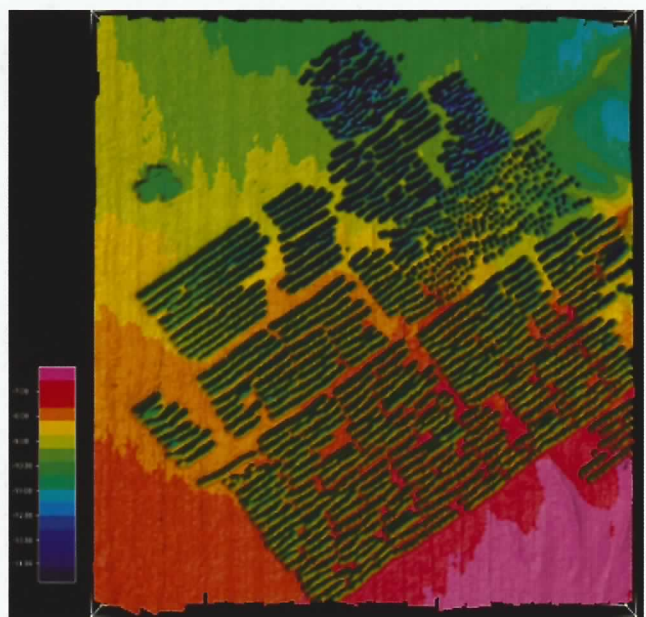
平成21年度補正予算により、熊本大学沿岸域環境科学教育研究センターが導入を進めていた生物生息環境解析システム（詳細は熊本大学シーズ集HP：<http://www.kumamoto-u.ac.jp/seeds/seeds/9180001/index.html>）が、平成22年6月30日に引き渡されました（平成22年7月6日熊本日日新聞朝刊等）。本システムは、インターフェロメトリー測深・サイドスキャン、パラメトリック高精度地層探査装置、浅海で航行可能な自律型環境モニタリングロボットから構成されています。本システムで得られる広域で高い精度の連続した環境情報（地形・底質・地下地質・水質・画像）は、水中を含めて正確な位置データに基づいて、三次元分布が可視化できます。このため、ダイバーの安全が保証されない大水深および2次災害が予測される被災地でも調査できます（平成22年11月19日西日本新聞朝刊等）。本システムによって国内最大の干潟と絶滅危惧種を含む希少生物が生息する有明海・八代海の生物生息環境を調査・研究することは、単に環境科学分野の先端的研究にとどまらず、台風常襲地域で多発する高潮などの海象災害の防災に向けた行政の意志決定に対する高度な技術的アドバイスなどに反映させることも期待されます（くまもと経済2011年10号紹介記事）。



自律型環境モニタリングロボットと搭載された環境センサー



AUVのCCDカメラ（3枚/秒）で撮影された2010年10月20日奄美大島土石流災害を受けた和瀬海岸サンゴ礁の回復状況（2010年11月16日撮影）



インターフェロメトリー測深・サイドスキャンで取得された諫早湾閉切堤防用の砂を採集した海底の地形（2010年8月2 - 6日調査）